

氏 名	権 洵 珠
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	第 4545 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	日本と韓国における大都市在宅高齢者のソーシャルサポートに対する選好 : その構造及び関連要因の比較
論文審査委員	主 査 教 授 白 澤 政 和 副主査 教 授 畠 中 宗 一 副主査 教 授 山 縣 文 治

論 文 内 容 の 要 旨

近年、韓国においては要介護高齢者の長期ケアに関する日本の制度やシステムに対する関心が高まる中で、高齢者福祉に関連する日韓比較研究も年々増えてきている。しかし、利用者中心の視点から高齢者本人の援助に対する考え方やニーズについて実証的に分析し、政策的・実践的提言を行っている研究は皆無に近い。本研究では、社会福祉の国際比較において、同じ「東北アジアモデル」と分類されている日本と韓国における大都市在宅高齢者のソーシャルサポートに対する選好を分析し、比較することによって、両国での類似点と相違点を明らかにし、そこから政策的・実践的提言を行うことを研究目的としている。本論文の概要は以下のとおりである。

序章では、本研究の背景と研究目的について述べた。即ち、社会福祉分野において国際比較研究が台頭した背景、そして、アジア諸国、特に、日韓両国を対象とした比較研究の必要性和意義について述べた。また、ソーシャルサポートの概念枠組みを用いて、高齢者本人のソーシャルサポートへの選好を実証的に捉える研究の意義を明らかにし、本研究の目的と分析の視点について詳述した。

第 1 章では、日韓両国における高齢者の生活状況について概観した。両国での高齢化の推移、高齢者の生活状況（経済面、健康面、家族形態面）、文化的背景である儒教思想と高齢者福祉との関連について論述した。また、両国での高齢者保健福祉サービスの展開過程及び調査対象地域である大阪市と釜山市の高齢者福祉サービスの現況について整理した。

第 2 章では、先行研究の考察とソーシャルサポートの概念定義を行った。ソーシャルサポートに関しては数多くの先行研究が行われてきたが、ソーシャルサポートの概念はまだ統一されていない。本章では、ソーシャルサポートの先行研究から、ソーシャルサポートの一般的な概念定義を概観し、ソーシャルサポートの操作的定義および測定尺度を提示した。ソーシャルサポートの特徴として、その内容（機能）は大きく手段的サポート（具体的・物質的な支援）と情緒的サポートが共通要素として含まれていること、測定はサポートの機能とそれを提供する人（提供主体、提供源、ネットワーク、サポートシステム）の組み合わせでされていることが整理できた。

第 3 章では、本研究の枠組み、調査方法、分析方法及び回答者の基本属性について説明した。本研究では、日韓の大都市居住高齢者のソーシャルサポートに対する選好の程度（様々なサポート源に対して、どの程度サポートを求めたいのか）、選好の構造（様々なサポート源に対する高齢者の選好は、どのような構造を示すのか）、選好の関連要因（サポート源に対する高齢者の選好には、どのような要因が関連しているのか）を捉え、両国間で比較考察する研究枠組みを設定した。調査方法は、日本では、大阪市の在宅高齢者のうち 2000 名を無作為抽出し、郵送調査を行い、韓国では、釜山市の在宅高齢者のうち 500 名を無作為抽出し、訪問面接調査を

行った。分析方法は、平均値、因子分析、一元配置分散分析、重回帰分析を用いた。回答者の基本属性の特徴は、性別と年齢の分布は両国で類似しているが、学歴、暮らし向き、家族形態、主な収入源などは相違していることを明らかにした。

第4章では、高齢者のソーシャルサポートに対する選好の程度を分析し、日韓両国での類似点と相違点を比較・考察した。その結果、両国とも、高齢者は様々なサポート源のうち、家族に対する選好度が最も高いという類似点があった。一方、韓国の高齢者は家族に対して手段的サポートを求めたいとする選好度が高いのに対して、日本の高齢者は情緒的サポートを求めたいとする選好度がより高いという点、日本の高齢者は手段的サポートにおいては家族への選好度とフォーマル資源への選好度が同程度に高いのに対して、韓国の高齢者は両者に対する選好度には程度差が大きいという点で、相違がみられた。即ち、日本の高齢者は、手段的サポートにおいては、家族とフォーマルサポート源を連続線上で認識している反面、韓国の高齢者は両者を明確に区分して認識しているものと考えられる。

第5章では、高齢者のソーシャルサポート選好度の構造を分析し、日韓両国での類似点と相違点を比較・考察した。その結果、両国とも、高齢者のソーシャルサポート選好度が「フォーマルサポート源」、「家族」、家族以外のインフォーマルサポート源」への選好という因子構造となった。このような結果は、欧米社会とアジア社会における高齢者のソーシャルサポート源に対する認識の違いに関する先行研究の知見と類似している。また、両国とも、高齢者はボランティアをフォーマルサポート源として認識していた。一般的にボランティアはインフォーマル資源として分類されるが、高齢者の認識はそれとは違うことが明らかになった。両国とも、主に社会福祉機関がボランティアを募集・養成し、高齢者援助につなげている現状から考えると、高齢者はボランティアに対してフォーマル機関に近いイメージを持ち、同程度の社会的距離感を形成するようになるのではないかと考えられる。このような高齢者自身の認識に配慮しながら、ボランティア資源を活用した高齢者援助のあり方を考えていく必要がある。

第6章では、高齢者のソーシャルサポート選好度と基本属性要因との関連を分析し、日韓両国での類似点と相違点を比較・考察した。その結果、両国とも、家族への選好度が高い高齢者は、子どもと同居世帯の高齢者、比較的暮らし向きが良好な高齢者であり、一人暮らしの高齢者は手段的サポートをフォーマルサポート源に求めたいとする選好度が高いという類似点がみられた。このような結果は、関連する先行研究の知見とも一致している。一方、韓国では60歳代の高齢者の家族への選好度が高いのに対して、日本では80歳代の高齢者の家族への選好度が高いという相違点がみられた。日本の結果は先行研究の知見と類似しているが、韓国の60歳代高齢者の場合、特異な傾向が示され、韓国の60歳代高齢者は、家族だけでなく、殆どのサポート源に対する選好が高く、注目される結果となっている。

第7章では、高齢者の手段的サポート選好度に関連する要因を分析し、日韓両国での類似点と相違点を比較・考察した。その結果、両国とも、社会的サービスを利用した介護が望ましいとする介護観を持つ高齢者は、手段的サポートをフォーマルサポート源に求めたいとする傾向が強かった。この結果から、高齢者の介護や社会サービスに対する意識が、サポート源の選択やサービス利用を決定する際に、大きな影響を与えていることが示唆された。

第8章では、高齢者の情緒的サポート選好度に関連する要因を分析し、日韓両国での類似点と相違点を比較・考察した。その結果、両国とも、概ね前章の手段的サポート選好度の関連要因と類似した結果となった。特記すべき点としては、情緒的サポートを求めたいという選好が高い高齢者は、精神的健康状態が良好でない高齢者であり、身体的健康状態とは関連していないことが明らかになり、高齢者の心理・精神面のサポートのあり方に焦点を当てたさらなる研究の必要性が示唆された。

第9章では、本研究の知見を総括し、両国での高齢者福祉の政策整備および援助実践に対して提言を行った。まず、日韓両国の高齢者の家族支援に対する高い選好を反映した施策として、家族介護を積極的に評価するシ

システムを導入することを提言した。また、韓国では、サービス利用の選択肢を増やすと同時に、高齢者支援における家族の役割を明確にするためにも高齢者福祉サービスの整備が急務であることを提言した。そして、様々なサポート源に対する高齢者の多様な選好を反映したサポート源のネットワーク化とケアマネジメントによる援助実践の必要性、高齢者の客観的なニーズだけでなく、介護や社会サービスに対する意識など主観的側面についてのアセスメント、高齢者の意識に配慮したボランティア・リンキングが必要であることについて提言した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本と韓国での大都市在宅高齢者のソーシャルサポート選好に関する比較研究である。社会福祉領域でも日韓比較研究が年々増えているが、制度比較に関するものが多く、それに比して、本論文は制度の利用主体である高齢者を対象として、高齢者自身が有している援助ニーズに対する考え方を比較分析していることに特徴がある。具体的には、日本では、大阪市の高齢者 2000 名を無作為抽出し、郵送調査を行い、韓国では、釜山市の高齢者 500 名を無作為抽出し、訪問面接調査を行ったものである。

論文は序章と本論 8 章から構成されており、序章では、本研究の背景と研究目的について述べ、第 1 章では、日韓両国における高齢者の生活状況について比較検討を行っている。第 2 章では、ソーシャルサポートに関する先行研究を考察する中で、ソーシャルサポートの概念を整理している。この結果、機能面では手段的サポートと情緒的サポートに、構造面では提供源に焦点を当てて、インフォーマルとフォーマルのサポート源を包括するものと操作定義している。また、ソーシャルサポート選好度は手段的サポートと情緒的サポートが必要になった時の支援を誰にどの程度求めたいのかの主観的判断尺度を用いることとしている。

第 3 章では、本論文の研究枠組である、高齢者のソーシャルサポートに対する選好の程度、選好の構造、選好の関連要因を捉え、両国間で比較考察することを示している。本章では、こうした研究枠組みをもとに、調査方法および分析方法を確定し、調査結果としての両国での回答者の基本属性を明らかにしている。

この一連の調査から明らかにされた知見の多くは、第 4 章から第 7 章に示されている。第 4 章では高齢者の選好の程度について両国の比較検討を行っている。その結果、両国とも、家族に対する選好度が最も高く、その特徴は韓国において特に顕著であり、東北アジアの一つの特性とされる同居率や家族主義規範との関連性が示唆された。また、韓国では、近隣・友人に対して情緒的サポート選好度は高いが、手段的サポート選好度は低い。日本では、介護や家事支援は家族への選好度が高いが、経済的サポートは家族への選好度は低く、フォーマル機関への選好度が高い。ここに、従来から議論になっている「階層的補完モデル」と「課題特定モデル」の内で、「課題特定モデル」を支持する結果を得ることができている。

一方、両国での高齢者では家族への選好度の内容に相違があり、韓国では、手段的サポートを求めたい選好度がより高く、逆に日本では情緒的サポートを求めたい選好度がより高い結果となり、フォーマルサービスの整備が進んでいる国ほど、家族を情緒的サポート源としての役割が期待されるという従来からの知見を立証することができた。同時に、家族への選好度とフォーマルサポート源への選好度の関係において違いがあり、韓国の高齢者は両者の選好度の平均値に大きな差があり、両者を意識的に明確な区分をしているが、日本の高齢者は両方のサポート源を連続線上で認識しており、日本の場合は家族とフォーマル資源は補完関係にあることを明らかにした。また、近隣・友人など家族以外のインフォーマルサポート源に対する選好度において違いがみられ、韓国の高齢者では、情緒的サポート源としての近隣・友人への選好度が家族に次いで高いが、日本の高齢者はフォーマルサポート源への選好度よりも低い。この結果は、日本の高齢者の近隣・友人関係はサポートの側面が弱いとする従来の研究結果を支持するものとなった。

第 5 章は高齢者のソーシャルサポート選好の構造についての両国で比較検討したものである。両国での選好構造の共通点として、「フォーマルサポート源」、「家族」、「家族以外のインフォーマルサポート源」への

選好因子が共通しており、家族と家族以外のサポートを区別するアジア型のパターンを示す特徴を見いだしている。同時に、ボランティアがフォーマルサポート源に属するという新たな知見を得ている。これについては、一般的にボランティアはインフォーマル資源として分類されるが、高齢者の認識はそれとは違うことが明らかになり、高齢者自身の認識に配慮しながら、ボランティア資源を活用していく必要が示唆されている。

高齢者の選好構造での両国間での違いは、手段的サポートのうち、経済的サポートに対しては両国での因子構造が相違していることである。韓国では、家事・介護支援と同じ因子内にあるのに対して、日本では、別因子となっている。この結果は、両国での高齢者への年金等の経済的支援制度整備の差が影響していることが示唆された。

第6章では、高齢者のソーシャルサポート選好度と基本属性との関連を分析し、日韓両国で比較検討しているが、類似点としては、家族への選好度が高い高齢者は、子どもと同居世帯、比較的暮らし向きが良好な高齢者であり、フォーマルサポート源への選好度が高い高齢者は、一人暮らし高齢者、暮らし向きが良好でない高齢者である。この結果は、関連する先行研究の知見を支持するものとなった。また、日本では80歳代高齢者で家族への選好度が高いのに対して、韓国では60歳代高齢者で家族への選好度が高い。また、韓国の60歳代高齢者は家族だけでなく、ほとんどのサポート源に対する選好度が高く、韓国の60歳代高齢者の老後への不安感と関連しているものと考えられる。

第7章と第8章では、手段的サポートと情緒的サポートに分けて、高齢者の選好度と関連する要因について分析しているが、類似点としては、手段的サポートと情緒的サポートの両方において、フォーマルサポート源への選好度と最も関連の強い要因は、高齢者の価値意識要因（介護観）であり、高齢者の介護や社会サービスに対する意識が、サポート源の選択やサービス利用を決定する際に大きな影響を与えることが示された。これは、公的サービス利用意向の関連要因に関する国内外での先行研究の知見と一致する結果となった。また、家族や家族以外のインフォーマルサポートが多い高齢者は、それぞれのインフォーマルサポート源に支援を求めたいとする選好度が高く、高齢者のケアタイプに関する類似の先行研究での知見と類似していることを明らかにした。

第7章での手段的サポート選好度に関連する要因についての両国間での相違としては、手段的サポートを家族に求めたいとする選好度での関連要因において、韓国では家族からの支援程度や家族形態など家族関連要因と有意な関連があるのに比べ、日本では家族要因以外にも多様な要因と有意な関連がみられた。これは、韓国に比べ日本では年金制度を含めた社会サービスが整備され、相対的に家族主義意識も弱まっており、高齢者が家族にサポートを求める場合には、身体的・精神的健康の悪化など何らかの理由で必要になったことによるものであると考察している。

第8章で特記すべき点としては、両国共に、情緒的サポートを家族に求めたいという選好が高い高齢者は、精神的健康状態が良好でない高齢者であり、身体的健康状態とは関連していないことが明らかになった。高齢者はうつ症状や孤独感などから様々なサポート源に対して情緒的サポートを求めたいと考えるようになるとみられ、高齢者の心理・精神面でのサポートのあり方に焦点を当てた一層の研究の必要性が示された。他方、情緒的サポートを家族に求めたいとする選好度と身体的健康度との関連において両国間で違いがあった。韓国では身体的健康度が良好な高齢者においても家族への選好度が高く、韓国高齢者の家族への選好は、健康状態が悪くなったときに介護ニーズを満たすことには限定されておらず、どのような健康状態においても家族への選好が高いことが分かった。

以上の第4章から第8章において得られた多くの知見や考察から、第9章では社会福祉政策や実践への提言を行っている。政策への提言として、高齢者の選好度に基づいた援助システムの整備が必要であるとし、家族介護評価システムを提案し、家族介護を有償化することによって、高齢者が求める援助の選択肢を増やし、真の選択権の保障につながるとしている。他方、韓国においては、年金や介護サービス等の公的サービスの充実

により、高齢者が必要な時にサービスを選択して利用できることによって、家族の役割が情緒的サポート源にシフトしていくことで、明確になっていくことの必要性を提案している。援助実践については、第1に、フォーマルサポート源への選好において最も重要な要因は、高齢者が持っている介護観という主観的価値意識であることから、相談援助においては、客観的なアセスメントに加えて本人の考え方を把握することの必要性を強調している。第2に、高齢者はボランティアをフォーマル資源に近いものとして認識していることから、ボランティアを活用した援助の際には、高齢者のボランティア観、ボランティアへの受容の程度などを慎重に吟味し支援する必要があることを提案している。

以上述べてきたように、本論文では日本と韓国での高齢者のソーシャルサポート選好の現状に関する多くの新たな知見を明らかにし、ソーシャルサポートについての従来からの研究結果の多くを検証できたことで、高い評価を与えることができる。同時に、日韓での高齢者をサポートしていく上で新たな示唆が多くなされていることも学問的に貢献できる点であるといえる。さらには、国際比較研究の方法として従来からなされてきた制度間比較を越えて、利用主体である高齢者を対象にして、高齢者の選好意向を比較分析し、高齢者福祉の政策や実践に提言を行うという、新たな研究方法を切り開いた先駆性に対しても高く評価できる。

これらの知見や考察は、高齢者福祉の分野において重要かつ有用な示唆を与えるものであり、本論文は博士（学術）の学位を授与するに値するものと判断した。